

歴史館だより

題字 最上家第47代当主 最上公義氏



- 最上家信奉納の神馬図
- 昨年のボランティア活動をふりかえり、今後の活動におもふこと
- 参加者の声 こども講座
- 研究余滴 「義光文書と古語辞典」

No.17
2010年3月発行



最上義光歴史館

最上家信奉納の神馬図

宮島新一

天童城本丸趾に建つ愛宕神社には「慶長八年（一六〇三）菊月」の棟札があつたとされるが、今は所在が確かめられない。その後、寛文年間に暴風のため社殿が破壊し、現在の建物は延宝六年（一六七八）に再興されたと伝える。

当社に山形最上家の最後の城主、家信が奉納した紙本金地著色の神馬図一幅が伝わり、天童市の文化財となっている。縦一八八・〇センチ、横二二・〇センチとたいへん巨大である。構図が似ていることが指摘されている若松寺（天童市）の郷目貞繁筆の絵馬よりも大きく、最上家の当主の奉納品としていかにふさわしい。図には「奉納／馬形／一疋／為諸願／成就／（欠失）／九月廿四日 家信」という墨書があるが、肝心の年号部分が欠損している。裏面には「慶（力）□□四年西九月□四日／□□源五郎家信自筆／愛宕社奉納」と記された後世の貼紙があるが、当然のことながら絵馬から掛軸に改装した後のものである。慶長十四

年が酉年にあたるが、家信はわずか四歳でしかなく自筆という文言と矛盾する。箱に「御宝物最上出羽守少将義光公御真筆」と書かれた板が打ち付けられているので、義光存命中の年号にしようとする意図的なものを感じられる。

『山形市史』は奉納年次を元和六年（一六二〇）としている。同じく家信が奉納した山形市内の日枝神社の絵馬に「おさめたてまつる馬形三疋／元和六年十月十六日 家信」と記されているのを参考にしたのだろう。日枝神社の絵馬は猿が馬を曳く様子を描いた珍しい図で、猿が描き加えられているのは日枝神社の使いが猿だからである。また、猿は厩を守るとされている。

厳密に言えば、奉納の年は家信の在国期間を点検したうえで結論を出すべきである。なぜ在国中に限るかと言うと、江戸から送り届けたのでは藩主が奉納した効果が薄らぐからである。以下では『山形県史』史料編の「金石文」の項に集められた、家信による造営、寄進史料をもとに在国期間を考えてみ

た。あわせて、小野末三氏による綿密な考察「山形藩主・最上源五郎義俊の生涯」を参照した。

最上家信は元和三年三月に父の最上家親が死去した二カ月後に、わずか十二歳で家督を相続している。当時の習慣では大人として認められるぎりぎりの年齢であつた。江戸で生まれ育つた家信は相続後なるべく早く国の家臣らに顔を見せる必要があつた。家信の若さに不安があつたのか、幕府は元和四年九月に最上領検使として神原左衛門をさし向けている。おそらく、それまでに家信は帰国していたはずである。

家信は帰国するや領内安定を願って矢つぎばやに各地の神社を再興している。元和四年七月に鳥海大権現薬師堂と遊佐町の藤岡大物忌神社を再興し、八月にはかねてから進行していた慈恩寺本堂落成法要を執り行ない、九月には酒田市の亀崎八幡神社を再興している。また、致道博物館に伝わる擬宝珠には「羽州鶴岡垂虹従山形三日町橋令造立之畢 元和四戊午年霜月吉辰」の銘文があるので、これも家信の助力によるのであろう。

このほか『神道体系 神社編』に収録されている羽黒山本社東之坊早鐘銘には「元和三年五月廿八日」の年紀と、「国主時代源朝臣家信公」という耳慣れない文言が記載されている。五月は相続直後にあたるので、父、家親の事業を受け継いだのであろう。もう一つ、



杉板金地著色「猿曳馬図」 山形市・日枝神社



紙本金地著色「神馬図」 天童市・愛宕神社／写真提供：天童市美術館

奉納
馬形
一疋
為諸願
成就
(欠先)
九月廿四日
家信

西之坊勤仕鐘銘として「元和四年林鐘（六月）吉日」という年紀とともに「国主源朝臣家信公」と記載されている。ここから元和四年の六月から十一月まで造営事業が連続していることがわかる。家信は相続後一年ほどたった六月までに帰国して検使を迎え、在国中に新しい藩主の威光を示そうと、もろもろの造営にいそしんだのであろう。

家信は翌年の正月は山形で過ごしている。『梅津政景日記』によれば、元和五年二月に秋田藩主が参府の途中、天童にて家信より贈り物を受けているからである。三月の細川忠興書状には「東奥の衆すみやかにのぼらるの由」とあるので、やがて家信も江戸に向かったであろう。五月には秀忠上洛につき江戸留守居役を勤め、六月には取り潰しとなった福島正則の江戸藩邸の接収にあたり、功績をあげている。

ところが翌年の元和六年三月になって幕府は再び監視役を山形に派遣している。「家士など相論おだやかならず。家信、放逸、淫行をほしいままにして、家臣の諫めを用いず。」という理由からだ。『徳川実紀』の同年九月十二日の条には、家信が舟遊びの挙げ句に大名という身分でありながら船頭と争論した、という不名誉なことが記録されている。ただし、同年七月から九月にかけて江戸城普請に携わる家臣らを労う家信の書状（山形市史・史料編一）が存在することによって、この時には

家信が山形に在国中だったことが明らかなので事実とはともかく、時期については誤りとしなければならぬ。

元和六年には元和四年と同じように家信の神社への寄進、造営が連続している。おそらく、家臣間の不和を静めようとする願いがこめられていたのだろう。十月には先にもふれたが日枝神社に絵馬を奉納し、十一月には鶴岡市湯田川の田川八幡神社、十二月には飽海郡八幡町の一条八幡神社を再建したことが棟札によってわかる。いつまで在国していたか不明だが、翌年の元和七年五月の銘がある伝山形城大手橋擬宝珠（酒田市佐藤家）が存在することや、大沼浮島神社の石灯籠に「羽州最上山形源五郎源家信 元和七辛酉年六月吉日」の銘があることから、元和七年六月までは在国していたようだ。

『梅津政景日記』によれば、元和七年十月十三日に佐竹義宣は江戸城での茶会のため家信の招待を断っている。で、それまでには江戸に戻っていた。佐竹義宣は翌年の元和八年三月の書状で、最上家信の町屋での傾城狂いと酒乱による不行跡を伝えており、八月になつてついに所領の没収が決定した。十七歳だった家信はわずか一万石に改易され、近江に転封となった。

一般には家信が義俊と改名したのは改易後とされるが、元和九年閏八月十三日付け慈恩寺別当宛書状に「最源五家信（花押）」とあるので、改易後も

しばらく家信を名乗っていたようだ。改名の時期はまだはっきりしていないが、翌年二月に寛永と改元されているので、このあたりが改名のきっかけになったかもしれない。愛宕神社の絵馬は改名前の寄進ではあるが、改易後とは考えにくい。諸社への寄進は元和四年六月から十一月までの間と、六年十月から七年六月までの間に集中している。ただし、『神道体系』の羽黒山の部には「藤松丸木像」の銘文として「国主時代山形源朝臣家信公 干時元和八稔卯月吉日」という意味の取りにくい記載がある。これをも含めるならば、改易直前の元和八年も範囲に入れない。

本図は二六・五センチ四方という日枝神社の絵馬とちがって規模がきわめて大きいことを考えると、初めて入国を果たした元和四年（一六一八）の可能性を考えてみたくなる。奉納日の直前の九月十二日に幕府の最上領検使を迎えていることもその心証を強くする。「諸願成就」の中には検視が無事終わることを願う意味もあったのかもしれない。絵馬は九月に奉納されている。上述のように家信が九月に在国していたのは元和四年と六年である。七年の可能性もまったくないわけではないが、除外してもよいだろう。奉納先の愛宕権現は火除けの神でもあるが軍神でもある。愛宕権現は武神らしく馬に乗る姿をしている。そこに

巨大な絵馬を奉納して、入国早々に家臣らに君主としての意気込みを見せようとしたのだろう。たまたまかもしれないが、元和四年は午（うま）年にあたる。だが、日枝神社に猿を描いた絵馬を奉納した同六年が申（さる）年だったことを考えると、単なる偶然とも思われない。ここでは元和四年を奉納の年と考えておきたい。

この絵馬からは初めて領国と家臣を目にする、年若い大名の心の昂ぶりが感じられないだろうか。図は、白地に茶色の横縞が入った小袖に緑色のたつつけ袴を穿き、紐を足首で結ぶ皮足袋に草鞋履きの若者が手綱を強く引いて、はやる馬を抑えながら駆けて行く光景である。形式的な図がほとんどの絵馬の中にあつて他には見られない躍動感がある。口取りを画面中央馬体の前に配して馬よりも強く印象づけようとしており、風俗画としても見ることできる。腰に結んだ赤い帯に差した脇差は印籠刻鞘風の拵でらしく、金色の盛上げ彩色が施されている。若者の月代を剃らずに頭部全体の髪を短く伸ばした髪型と、南蛮風俗を意識したものでろうか、首の回りに認められる鋸歯状の襟飾りが印象的である。風俗や馬の表現からすると家信の署名がなければ、この図はおそらく寛永期以降の作とみなされるだろう。だが、本図が元和四年（一六一八）の作であるならば、従来、寛永期とされていた

風俗画、代表的な作品をあげれば国宝の「彦根屏風」などを、元和期にまでおし上げる有力な根拠となるだろう。その可能性についてはすでに『風俗画の近世』（至文堂 日本の美術）において指摘したことがあるが、本図の存在を知ってその意をいっそう強くした。元和期の作とはつきりとわかる絵画は少ない。元和五年の建物に描かれた旧円満院（現在は京都国立博物館）障壁画中の風俗画は、慶長二十年（一六一五）に描かれた名古屋城対面所の風俗図の系統を引く。従来は、十年間におよぶ元和期は慶長期の尻尾のように扱われてきた。最近、狩野博幸氏によって紹介された元和六年の東福門院入内行列を描き加えた「洛中洛外図」一屏風にしても桃山時代の作品との区別が難しい。しかし、今後は元和期を寛永期を先取りした時代として二重写しにして見てゆく必要があるだろう。

『治代普顕記』（『大日本史料』一二編四七）によれば、最上家信は「平生遊女傾城にたはふれ、有時は舟をもよおして夜を明かし、有時は居屋敷へ數十人の遊君を招集めかぶき躍を事とし」ていたとある。家信が改易された翌年の元和九年に、福井藩主の松平忠直が乱行を咎められて隠居を命じられ、豊後に配流されている。忠直も十三歳で家督を相続し、一国という都の遊女をつれ帰っている。家信と忠直の行跡はぴったりと重なる。松平忠直も最上

家信も元和期という、大坂夏の陣の「戦後」という同じ空気を吸いながら、享樂的な日々を過ごした若き大々名であった。

松平忠直は岩佐又兵衛という希代の風俗画家を世に押し出した。一方、最上家信は自筆の絵馬を残した。本図を日枝神社の同じ白黒斑の絵馬と比較すると、尾の表現や斑の具合から見ると筆と考えられ、職業絵師らしからぬ大胆な筆遣いで描かれているところから、伝承どおり最上家信筆とみなす可能性は十分にある。そうであるならば、最上家信は自身の手で元和期の風俗を今に伝えるという、思わぬ功績を残したことになる。

（山形大学教授）

略歴

宮島新一（みやじましんいち）

一九四六年愛知県生まれ。文化庁、京都・奈良・東京・九州国立博物館などを経て、二〇〇七年から山形大学教員。研究分野は日本絵画史。

著書『武家の肖像画』至文堂

日本の美術シリーズ（一九九八）

共著『画壇統一に賭ける夢』文英堂

（二〇〇一）

『戦国合戦絵屏風集成』（川中

島合戦図・賤ヶ岳合戦図／長

久手・長篠合戦図 中央公論社

（一九八〇～八二）

昨年のボランティア活動をふりかえり、 今後の活動におもつこと

阿部 久照



昨年はNHK大河ドラマ「天地人」のおかげで、最上義光歴史館を訪れた人が五万二千人を超えました。ドラマは十一月末で終了しましたが、会の役員の方々はじめ会員のみなさんが一丸となって案内してくれた賜物と深く感謝いたします。

来館者の方よりアンケートやメールで、自分の故郷と山形と繋がりが身近になった話や、やさしく教えていただいた話等、暖かい言葉で多数寄せられています。

ドラマが進み秋のゴールデンウィークのときには、団体客が館内に入りき

れず外で待機してもらいながら案内したこともありました。会員たちも、休憩する間も無く頑張っていた。中には体調をくずしたり、声が出なくなったりした人まで出てしまいました。本当に御苦労をおかけしました。

また、私達の活躍がNHK山形放送局に伝わり、夕方のニュース番組の生中継で県民のみなさんに活動している姿を紹介することができました。

事前に打ち合わせを行い、私は最上義光の人物像と業績を三分間説明をすることになっていたのですが、当日のニュースソースによって放送内容が変

り、結局説明は三十秒になってしまいました。ほかのボランティアの皆さんにも、それぞれ案内している所を分担し、団体客を前にして長谷堂合戦図屏風を案内している姿や、義光公が銃弾を受けた兜の話を緊張しながら説明している様子などが放映されました。後日、私の同級生からは「十年ぶりにテレビでお前とあって、元気な姿をみて安心したよ」と電話がありました。今となつては、出演した皆さんは緊張しながらも良い思い出になったことでしょう。

また、その頃が大河ドラマでは、長谷堂合戦の放送が迫った頃で、どんな役者が最上義光を演じて兼続と対決するのか？期待していましたが、結局は配役も決まらず合成写真の組み合わせで戦いのシーンが終わってしまった。私達だけでなく、山形県民の皆さんはすごく不満だったことと思います。全国の歴史ファンには、どのように映しだされたのでしょうか？残念です。私は来館者を案内して感じたことが二つあります。

一つは、県外の人に「義光」と書いたところを指して「どう読みますか？」と尋ねると約八割位の人が「よしみつ」と読む人が多かったのには驚きました。なかには「今日バスガイドさんから聞いて初めて知りました。」：意外と知らなかったことです。

二つめは、県内の人は「義光」を「よしあき」とよんでもらえるし、斯波兼頼も名前だけは知っています。しかし同じ血族であり兼頼の末裔であることを知らない人が多いことです。

これは、いったいなぜなのでしょう？信長、家康と比較する訳ではありませんが、「関ヶ原の戦い」以降に家康

に認められて五十七万石になり、日本で五番目の大人名になったのになぜだろう。

戦国乱世の世に人を掻き分けて、華々しく活躍したが、時代の流れに乗れず散つていった悲運の武将の一人なのだろうか？...

私は、これからのボランティア活動の重要な課題として取り組むべきだと考えます。

また、小学生も学校の副読本で学んで山形の歴史を勉強しに歴史館にきます。その時の先生との対話で「地域史の中に必ず最上義光のことが載っている。で、こうやって説明してもらおうと本当に助かりますよ！」とこんな話でした。

この話を役員会で話題にしたら、「来年度の事業計画で取り上げて、出前授業」のような形で希望する学校があれば積極的にこちらから出ていって説明をしよう。そのあと実際に来館していただいで現物をみてもらおう。」と前向きな意見がでています。

そのためには、子供たちの目線での資料づくりや学校へのアプローチなども検討する課題はありますが、実施したいものだと考えています。

さらに、事業計画の中に現地研修、スキルアップの勉強会等も取り入れながら、もっと幅広い案内ができるように計画したいと思います。

私たちはこれからも、最上義光公を多くの人にもっと知ってもらえるように、最上義光歴史館の良きパートナーとして来館者に案内して参りたいと思いますので、これからも皆様の御協力よろしくお願いたします。

（最上義光歴史館サポーターの会

「義光会」会長）

こども講座

参加者の声



上手くできたよ 香ぶくろ

山形市立第一小学校
武田 真依

私は、最上義光歴史館へは、授業で来館したことがありましたが、子ども講座には初めての参加なので、行く前からとても楽しみにしていました。子ども講座は全部で三回ありましたが、その中でも香ぶくろ作りがとてもおもしろかったです。

私はこの香ぶくろをととても気に入っていつも遊びに行く時には、バックにぶらさげて持ち歩くようになりました。



貴重な体験

友達のうちちゃんからさそれれて銘きりをしにやってきました。その時は、失敗してしまったらという不安と、成功した時の喜びがかさなった気もちでした。

そして今日、銘きり初体験です。わたしはてっきり彫刻のようにけずるのかとおもったら銅板をへこますようにすると教えてもらい、初めてわかりました。理解した後はずいぶんできるようになってきました。少しずつへこませて、やっとの思いで作ったのはチヨウ。わたしは大の虫好きなのでそれがきれいにできたときはとてもうれしかったです。そして、ペンでかいた下書きを消してできあがりしました。

もしかしら最初で最後かもしれない銘きり。さぞつてくれたゆうちゃん、企画してくれた先生方、貴重な体験をさせてくれてありがとうございました!!

山形大学附属小学校
谷口 奈生



ひょうろ丸をつくったよ

山形市立第七小学校
伊関 光彬

ぼくは、れきしがだいすきだけど、昔の人の食べものはしりませんでした。でも、この教室にかよって、昔の食べものことも、すこしはわかるようになりました。ぼくは作ってみるまえにさいりょうのにおいをかぎました。そして、さいりょうはカップにいれて、ませました。ぼくはあまりにもかたいから、しばらくして、うでがつかれてしまいました。でも、はんばにしてはおいしいひょうろ丸が作れないので、がんばってさいりょうをこねました。おばあちゃんのほうを見ると、うまくこねていました。ぼくもおばあちゃんにまけないようにがんばりました。つぎに、こねたさいりょうをわけました。さいごにゆでました。ぼくは、はやく食べたかったので、まっています。そしたら、自分のがゆであがりました。ひょうろ丸は思ったよりおいしかったです。



○平成21年度 事業スナップ



○最上家信奉納の神馬図を調査される宮島教授 (於 天童市美術館)



○サポーター養成講座「義光塾」
幅広く郷土史を学びスキルアップを図ります



○ポーズを決める最上義光(館長)と女子高生たち

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
<http://mogamiyoshiaki.jp>



○NHK大河ドラマ「天地人」のエンディング
「天地人紀行」第38回の撮影
最上義光は登場しませんでした…!?



○こども講座「兵糧丸を作ってみよう!!」
ラジオ番組でも放送されました



○こども講座
・2月28日 「香袋を作ってみよう!!」
・3月7日 「兵糧丸を作ってみよう!!」
・3月14日 「銘切りに挑戦してみよう!!」
会場／最上義光歴史館 研修室
講師／棚井美果
講師／内野広一
講師／高橋恒敏氏

○歴史講座
最上義光歴史館サポーター養成講座「義光塾」
会場／中央公民館 第3研修室
・2月1日 「亀ヶ崎城の発掘調査について」 講師／高桑 登氏
・2月8日 「義民が駆ける〜三方国替〜」 講師／佐竹 迪氏
・2月22日 「戦国時代の城郭と合戦の様相」 講師／伊藤清郎氏
・3月6日 「武将と日本刀」
・3月13日 「郷土の刀工」

○歴史講座
「日本刀入門講座」
会場／中央公民館 第3研修室
講師／布施幸一
・2月13日 「日本刀の歴史」
・2月20日 「日本刀鑑賞の手引き」
・2月27日 「絵画資料にみる日本刀」
・3月6日 「武将と日本刀」
・3月13日 「郷土の刀工」

○企画展
「市民の宝モノ2010」
1月13日ー4月11日

○常設展示Ⅲ
「屏風絵の美」
12月8日ー1月11日

○常設展示Ⅱ
「慶長出羽合戦〜対決!!最上義光vs直江兼統〜」
7月7日ー12月6日

○常設展示Ⅰ
「鐵 [Kurogane] の美2009」〜郷土の刀工たち〜
4月7日ー7月5日

○企画展
「市民の宝モノ2009」
4月1日ー同月5日まで前年度継続

平成21年度事業

義光文書と古語辞典

長谷勘三郎

日本語のある語がいつ発生したかという問題は、日本人の生活や思考・感情に関連する重大なことがらである。

たとえば、今の日本ですら「あつちゅう使われる」「がんばる」という単語などは、そう古い言葉ではないようだし、初めはそれほど頻繁には使われなかつたらしい。ということは、古き日本人はそれほど「がんばる」必要がなかつたからかもしれない。

語彙や語法のできるだけ早期の用例を見つけ出すことは日本人の生活と心の変遷を明らかにすることにつながり、国語学者（辞書編纂者）にとつては大きな関心事なのだ。

*

何年前かにびつくりしたことがある。最上義光の手紙の中に「けりやう」なる語を見つけ、手元にあった「岩波古語辞典」を引いてみたら、なんと当の義光の手紙そのものが用例として引かれていたのだ。

けりやう【仮令】一【副】

- ①たとえ(用例)「風姿花伝」ほか
- ②たとい。かりに。よしんば。(用例)「正法眼蔵随聞記」ほか

③かりそめにも。かりにも。「どなたにも理はひとみちく、有る事に候

―双方をくらべ理の少なきを非分なりと申すばかりに候」

(伊達家文書一、最上義光書状)

国語学者の博搜ぶりに舌を巻いたのだつたが、義光の文章がこういうところだ役立っている」と知つたのは楽しかつた。

さて、義光の遺著『連歌新式注』山形市所蔵本の解説作業をしているうち、気になる言い回しを見つけた。

一 はつせ寺とか鐘とかすれ八山類也た、泊瀬とはかり八非山類

(下略)

『写本三四丁ウラ』第三二〇条

現代語では「AとかBとか」という言い方は並列の表現として多用されるが、古典では管見にない。小学館『日本国語大辞典』三〇〇四／第二版」で見ると、用例は寛永十五年(一六三八)

刊の「蒙求抄」から「霊とか厲とかせよとあるほどに」が引かれている。他の大規模辞典でも同書から採っているところを見ると、現段階ではこれが最古の用例なのだろう。

だとすれば、文禄四年(一五九五)

の義光の『連歌新式注』は、これをさかのぼること四〇余年。今後の辞典では用例の初出となるかもしれない。

平成22年度事業

1. 展示事業

- (1) 企画展 「市民の宝モノ2012」展(継続企画)
 - 1月12日～4月12日

山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

(2) 常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながら、テーマをきめて一部コーナー展示を行います。

- ①「鐵の美2012」武士と日本刀」
 - 4月13日～7月11日
 - 7月13日～10月11日
 - 10月13日～1月10日
- ②「屏風と板戸絵(仮称)」
- ③「武將の手紙(仮称)」

2. 教育普及事業

- (1) 歴史講座(年2回)
 - 最上義光や郷土史に関する講座など、歴史と文化に関わる講座を実施し、郷土の歴史と文化の啓蒙に努める。
- ①「義光塾」(1月・3月)
 - 最上義光や郷土の歴史について多角的に学習して、歴史館サポーターの養成とスキルアップを図ります。
- ②「郷土史講座」(1月・3月)
 - 最上義光や郷土史について学習して郷土の歴史と文化に対する理解を深める一助とします。
- (2) こども講座(年1回)
 - 小学生を対象に、歴史に触れる機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

3. 調査研究事業

- (1) 最上家関係資料・史跡調査(継続事業)
 - 県内外に残る最上家等に関する文書資料や文化財・史跡などの調査研究を進め、写真撮影等による記録保存及び目録作成、複写等の資料整備を行い、その成果を紹介いたします。

4. その他の事業

- (1) ITに係わる企画と情報管理
 - 歴史館のホームページを活用して様々な情報を発信するとともに、企画から物販まで幅広く展開していきます。
- (2) 『館だより』の発行(年1回)
 - 事業報告や考察、山形の歴史や最上家に関する情報を広く一般に提供します。

※詳細については最上義光歴史館にお問い合わせください。

表紙の資料

神馬図(部分) 天童市・愛宕神社

本図は、今から約四〇〇年前に最上義光の孫の家信が神馬を曳く若者(神人、舎人)を描き奉納したものです。特に若者の風俗が注目されます。中でも、番犬や音楽を嗜む現代の若者が用いるスタッズカラーに似た意匠の襟飾りが描かれていて、モダンで大変興味深いのです。また、宮島教授から「素人の人物画には作者の顔の特徴が投影される場合がありますよ」と伺いました。もしかするとこの若者の顔は、作者の家信に似ているかもしれませんね。愛宕神社は、最上義光が天正年間に天童頼澄の居城天童城を攻略し、後に舞鶴山山頂の本丸跡に勝軍地蔵を本尊として建立した神社です。※神馬図の詳細につきましては、2～4頁の宮島新一氏の論文をご覧ください。

ご利用について

- 開館時間 午前9時から午後4時30分
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日(国民の祝日となる場合はその翌日) 12月29日から1月3日
- 交通 JR山形駅より徒歩約15分 大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図



平成22年3月発行
編集・発行 財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-1-5
023-16225-17101
023-16225-17102
http://mogami-shiki.jp
印刷 株式会社大風印刷

